

35 雀の宮

伝承地：雀宮町

参考書籍：7・8・10・15・17・21



(雀宮神社本殿)

宇都宮の南部に位置する雀の宮は、現在の「雀の宮神社」を地名として発展してきた町であり神社名については、下野の始祖である崇神天皇の皇子豊城入彦命の流れである御諸別王を祭って「鎮の宮」と呼んだことに始まるという説がある。

この説だと「鎮の宮」が「雀の宮」に転化したことになるが、ほかに鳥の雀を祭って「雀の宮」とした説があるが、この説にも二つの説がある。

一説は、「ある男が妻と密夫に謀られ、餅（饅頭）に針を入れて食べさせられてしまった。苦しんで寝ていると、庭先にやはり苦しみながら蕪を食べている雀がいた。その雀は数日にわたってやってきて蕪をついばんでいたが、ある日元気になって飛びさっていった。

男は、雀のいたあたりをよく見ると雀の糞の中に折れた針を発見し、自分も毎日雀のまねをして蕪を食べたところ一命をとりとめることができた。男は命が助かったのは雀のおかげだということで、雀を大明神として祭る宮を建てた。」という話で、「雀の功德」とも「饅頭物語」ともいわれている。他の説は、次のような話しである。

平安時代の中ごろ、(長徳元年—995—)のことです。藤原実方という人が陸奥の守になりました。そして、陸奥の国へ向かう途中、雀宮の地でしばらく休み、再び出発しました。

一方、京にいて夫の無事を祈っていた妻の綾女姫は、実方の仕事が終わりと、京に帰るのを待ちわびていたが待ちきれず、夫をたずねて奥州へ旅立ちましたが、雀の宮まで来たとき、病気になるとうとう亡くなってしまいました。綾女姫は、息をひきとる時に「宝物の玉」をとり出して、「わたくしが持っているこの宝は、むかし、天照大神と素盞鳴命が約束ごとをしたときにとりかわした玉で、藤原家に代々伝わっている大切なものです。素盞鳴命の不思議な魂をもった玉なので、この村を守る神として奉れば、この村は永く栄えるでしょう。」と言いました。

村人たちは、その遺言を信じて神社を建て、その「宝物の玉」を納めて、素盞鳴命をまつり、村の守り神にしました。ところが、陸奥の国の役人をしていた藤原実方も、長徳3年(997)9月19日に陸奥の国の笠島というところで病気になる、死んでしまいましたが実方の魂は雀になり、妻の死んだ場所に飛んで来たということです。それ以来、ここに住む里人は、実方もいっしょに神社にまつり「雀宮大明神」と名づけたと言われています。

